

草津市立矢倉小学校通信 令和3年1月15日 NO.19



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

ことばづかいやふるまいかた、心づかいの仕方を育て合えるように

休み時間だからと、何人かの子が校長室へ遊びにきてくれた。ノックがあり、そうっとドアを開け、お客様がいることに気づくと小さな声で「失礼しました。」とドアを閉める。入れ代わり、立ち代わりの来室、そして場の雰囲気をごわさない、上手なあいさつをしてくれた。来室されていたお客様からは、いろいろなお子さんがやってくることに對する驚きと、どの子もちゃんと挨拶できることに感心される。「失礼しまあす。」という大きな声といっしょに校長室に突入してくるような、びっくりするようなことにならないかと案じていたのだが、結局、そのような事態にならずに休み時間は終わった。おそらく校長室のドアが閉まっていたからだろう。「来客中」のカードをドアにつるしておくべきだったかなと心配していたものの、まったく余計なことだった。いつも開いているドアが閉まっている、ただそれだけのことで、「何かあるかもしれない、気をつけよう、まずはノックしよう…」そんな心づかいが自然と実践できるような、よい機会になっていたのかもしれないなどと、勝手な解釈をしていた。

そのときのお客様が語っておられたこと

どのようにふるまうとよいか、これはそう簡単にしつけられるものではない。ことばづかいにしる、立ち居ふるまいにしる、日ごろからの経験、とりわけ共に過ごす身近な親しい仲間、家族からの影響は実に大きいとのこと。おたがい声をかけ合って、どうするといいかあれこれ考え、相談しながらやってみる、子どもにとってはやりがいのある、とてもたのしいできごとなのかもしれない。このようなことが、ことばづかいやふるまいかた、心づかいの仕方を育て合う場となるのでしょうか、と。

小さい頃、私はどちらかといえばあいさつが苦手だった。そんな私は、兄や従妹たちから、親戚一同が集まる時などは、とにかく笑顔でいるようにと言いつけられ、それでも陰に隠れようとするときは、少しでもいいから顔を出すようにと引っぱりだされたのである。やがて、一言でいいから「こんにちは」のあいさつをするように、そして顔を覚えてもらうためにその場にじっとすわって話を聞いているように、などと優しく諭されたり、なだめられたり、時には厳しく指図されたりするようになっていった。何かにつけて引っ込み思案となる私にとっては、兄や従妹たちがみんなの前で失敗しないようにそっとかばってくれたこと、恥ずかしい思いをさせないようにしてくれていたことが救いにもなり、自信にもなっていたように思われる。今ではなつかしい思い出である。

その一方で、大人たちは、私たち子どものできばえ、つまり行儀の良さがどれほどのものだったか、ちゃんとできていたかを問題にすることがあった。が、それ以上に、おたがいがどれほど気持ちよく、たのしい時間を過ごすことができたかをふりかえり、喜び、楽しむようにしていたように記憶している。

ことばづかいやふるまいかた、心づかいの仕方など、たがいの心が大切にされるすごしかたについて、どうするとよいか、今一度、みつめなおしておきたい。

校長 大林道範